

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520100

研究課題名(和文) マネとポスト・リアリズムの画家たち

研究課題名(英文) Manet and the Painters of Post-Realism

研究代表者

三浦 篤 (MIURA, ATSUSHI)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：10212226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：1860年代のフランス絵画をクールベ以後の「ポスト・リアリズム」という切り口から捉え、マネ、ファンタン＝ラトゥール、ドガ、ルグロ、ホイッスラーの5人の画家たちに共通する美意識や造形手法を総合的に考察した。その結果、絵画の枠組みの意識化と作品の切断、画像のアッサンブラージュ、画中画や鏡の挿入、多様なマチエールの併用等々の特質が浮かび上がった。西洋絵画史における「近代的なタブローの生成」とも言うべき現象が出現したのがまさに1860年代のフランスであり、マネを中核とする「ポスト・リアリスト」たちがそれを担ったのである。

研究成果の概要(英文)：I approached the French painting of the 1860s from the perspective of "post-realism" after Courbet, and considered comprehensively the aesthetics and plastic techniques that are common to five painters: Manet, Fantin-Latour, Degas, Legros and Whistler. As a result, emerged the characteristics as awareness of the pictorial framework and cutting of works, assemblage of images, insertion of pictures and mirrors in paintings, usage of different "matieres", etc. It is just in France of the 1860s that the phenomenon to be referred as "genesis of modern tableau" appeared in history of Western painting. Manet and "post-realists" took on this role.

研究分野：西洋美術史

キーワード：マネ リアリズム フランス絵画

### 1. 研究開始当初の背景

研究者はエドゥアール・マネの絵画を長年調査研究しているが、西洋絵画史上きわめて重要な転換点に位置する1860年代のマネ作品をどのように分析すべきか模索していた。そのための新しい視点がクールベ以後のレアリズム絵画を「ポスト・レアリズム絵画」として捉え直し、マネとその世代の画家たちに共通する特質を解明するという方向性である。マネの斬新な造形性は同世代の画家たちにも多かれ少なかれ見出されるのであり、そのような観点で1860年代のフランス絵画を丹念に見直すことが、マネ研究に有効な形でフィードバックすると思われたのである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀フランス絵画史で重要な位置を占める画家マネおよび同世代の前衛画家たちの画業を、クールベ以後の絵画における新しい現実表象という観点から1860年代の「ポスト・レアリズム」の絵画と捉え、その特質を調査研究することにある。取り上げる画家はマネ以外に、ファンタン＝ラトゥール、アルフォンス・ルグロ、ジェイムズ・ホイッスラー、エドガー・ドガである。彼らの作品と資料に加えて、取り巻くイメージの環境(美術全集、美術雑誌、版画、特に写真)を精査し、伝統的な「タブロー」を崩壊に導いた西洋近代絵画史の変革期の様相を具体的に解明し、新たな歴史的位置づけを行いたい。

### 3. 研究の方法

本研究の調査は5人の画家(マネ、ファンタン＝ラトゥール、ルグロ、ホイッスラー、ドガ)の1860年代の作品と資料の調査を基本とし、それに当時の美術全集、美術雑誌、版画類、写真資料の調査も加える。フランス(パリ、グルノーブル、ディジョン、アランソン)、アメリカ(ロサンゼルス、ワシントン、ニューヨーク)などの美術館、図書館が所蔵する作品と資料を精査し、特に「ポスト・レアリズム」の画家たちのヴィジョンに大きな影響を与えたと推定される写真に関しては、フランス国立図書館(パリ)とゲッティ・センター(ロサンゼルス)で詳しい調査を行う。以上の成果を基に、彼らの作品の特質を「タブローの崩壊」という観点から具体的に分析し、1860年代のポスト・レアリスムの絵画の新たな歴史的位置づけを心みたい。

### 4. 研究成果

(1) 平成24年度は2度調査旅行を行った。第1回目は、ロサンゼルス市のゲッティ・センターの美術館と研究所において、19世紀の古写真や研究資料を調査し、資料収集を行った。第2回目は、前半にパリのオルセー美術館でマネの《草上の昼食》、《エミール・ゾラの肖像》、ファンタン＝ラトゥールの《読書す

る女性》、《ドラクロワへのオマージュ》、《パティニョール街のアトリエ》を実地調査し、絵画資料室で作品に関するデータや関連資料を収集した。後半には、グルノーブル図書館でファンタン＝ラトゥールの書簡や関係資料を閲覧調査した。

調査結果を整理した後で、マネとファンタン＝ラトゥールを対象とし、1860年代の「ポスト・レアリズム絵画」として、次のような造形的特徴を抽出した。(1)絵画の粹取りでモチーフを部分的に切断する技法、(2)既存の多様なイメージ(特に複製イメージ)を寄せ集めて再構成する手法、(3)画中の空間を重層化する画中画や鏡や開口部の挿入、(4)絵の具の塗りの密度、筆触の痕跡の多様性に基づくマチエールの作り方。以上4つの手法や技法は、ポスト・レアリズムたちが伝統的な「タブロー」の形式や条件から逸脱して、新たな特質を備えた「タブロー」を作り上げていったことを端的に示す指標である。その際に、絵画との比較を通して、イメージの環境として同時代の写真と複製イメージが果たした役割が大きいことも判明した。

(2) 平成25年度はフランスで調査を行い、特にアルフォンス・ルグロの作品について調べるため、パリのオルセー美術館(《加辱刑》《十字架磔刑像》)、ディジョン美術館(《エクス・ウォト》)、アランソン美術館(《聖フランチェスコの召命》)で実際に作品を観察し、関連資料を収集した。パリのフランス国立図書館では、19世紀フランスの写真を調査するとともに、1850年代末から1860年代半ばのサロン(官展)の批評記事を調査した。1859年、1861年、1863年、1864年、1865年のサロン批評のなかで、「ポスト・レアリズム」たちの作品に言及している記事を洗い出し、その評価の実態を探った。

サロン批評の調査結果も踏まえながら、ルグロの造形手法に関して、マネやファンタン＝ラトゥールの場合と比較検討した。クールベのレアリズムの影響、奥行きを浅い空間表現、画中画の挿入、コラージュやアッサンブラージュなどの視点から、ポスト・レアリズムの一員としてのルグロの特質が浮かび上がってきた。レアリズムという言葉が使われながらも、1850年代のレアリズムとは位相の異なる絵画が出現したことが、「タブロー(絵)」と「モルソー(断片)」という言葉の使い方からも推定されることは、重要な成果である。

(3) 平成26年度は、第1回目調査旅行(ワシントン、ニューヨーク)ではホイッスラーの作品を主たる対象とし、ワシントンのフリーア・ギャラリーで《緑色とバラ色のハーモニー：音楽室》、《紫色と金色の奇想曲：金屏風》、孔雀の間の《磁器の国の姫君》を空間表現、画中画、ジャポニスムなどの側面から調査した。画中画に関しては、二

ニューヨークのメトロポリタン美術館が所蔵するドガの《版画愛好家》、《ジェイムズ・ティソの肖像》も重要な作品で、詳しく観察した。第2回目調査旅行(パリ)では、オルセー美術館でドガの初期作品《ベルレッリ家の肖像》、《ドガとエヴァリスタ・ダヴァレルヌ》等を詳細に実地調査し、同時に同美術館の絵画資料室で当該作品に関するデータや関連資料を収集した。最終年度に当たるので、フランス国立図書館で写真資料とサロン批評の補足調査も行った。

造形分析に関しては、ドガとホイッスラーを研究対象とし、やはりマネ、ファンタン＝ラトゥール、ルグロと同様の特質を確認することができた。

以上のように、1860年代のフランス絵画を「ポスト・リアリズム」という切り口から捉え、マネ、ファンタン＝ラトゥール、ドガ、ルグロ、ホイッスラーの5人の画家たちに共通する美意識や造形手法を総合的に考察した。その結果、絵画の枠組みの意識化と作品の切断、画像のアッサンブラージュ、画中画や鏡の挿入、多様なマチエールの併用等々の特質が浮かび上がった。西洋絵画史における「タブローの崩壊」あるいは「近代的なタブローの生成」とも言うべき現象が出現したのがまさに1860年代のフランスであり、マネを中核とする「ポスト・リアリスト」たちがそれを担ったのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

三浦篤「印象派と浮世絵版画の関係再考 - マネの海景画を中心に」『ジャポニスム研究』34号、別冊、2015年、p. 85-90。(査読有)

三浦篤「モダニズムにおける過去と現在 - エドゥアール・マネにおける模倣と創造 -」、陳岡めぐみ編『国際シンポジウム「時の作用」』、2014年、p. 59-66。(査読無)

三浦篤「マネとパリ - 越境する散策者」、喜多崎親編『西洋近代の都市と芸術2: パリ、19世紀の首都』竹林舎、2014年、p. 149-174。(査読無)

三浦篤「印象派と水辺の風景 - マネの《アルジャントゥイユ》を中心に」『光の賛歌 印象派展 - パリ、セーヌ、ノルマンディの水辺をたどる旅』カタログ、東京富士美術館、福岡市博物館、京都文化博物館、2013年10月、p. 14-21。(査読無)

三浦篤「セザンヌのパリ - マネとの関係を中心に」、シンポジウム『「セザンヌ - パリとプロヴァンス」展から見る今日のセザン

ヌ』、国立新美術館、2013年3月、p. 46-59。(査読無)

Miura Atsushi, « Manet et le plein air sur les rivages de la Manche », Frédérique Cousiné (dir.), *L'Impressionnisme : du plein air au territoire*, Presses universitaires de Rouen et du Havre, janvier 2013, p. 175-185。(査読有)

三浦篤「マネ、政治、検閲 - 《皇帝マクシミリアンの処刑》をめぐる」『西洋美術研究』No.16、2012年6月、pp. 111-125。(査読無)

〔学会発表〕(計 6 件)

Miura Atsushi, International Conference: Transcultural Framing(s): Materials and Metaphors, « The Problem of Framework in the artistic adaptations between Japan and France - Japonisme, Raphaël Collin and Modern Japanese Painting - », Karl Jaspers Centre for Advanced Transcultural Studies, Cluster of Excellence *Asia and Europe in a Global Context* at Heidelberg University (Germany, Heidelberg), 31 October - 2 November 2014.

三浦篤、ジャポニスム学会、畠山公開シンポジウム「ジャポニスムの全貌 - ホイッスラーから何が始まったのか?」、発表「1860年代のホイッスラー - 異国趣味と画中画の視点から」、京都国立近代美術館(京都府・京都市)、2014年10月3日~4日

三浦篤、オルセー美術館展関連シンポジウム「マネから印象派へ - 1860年代のフランス絵画の変貌」、基調講演「1860年代のマネとそのグループ - ポスト・リアリズムから印象主義へ」、国立新美術館(東京都・港区)、2014年9月13日

三浦篤、ジャポニスム学会、シンポジウム「ジャポニスムの諸相」、発表「フランス絵画と浮世絵の関係再考 - マネを中心に」、世田谷美術館(東京都・世田谷区)、2014年8月2日

Miura Atsushi, 12e Ecole Internationale de Printemps à Tokyo, « Repenser à “Wakugumi” dans l'histoire de l'art », *Wakugumi (cadres conceptuelles/Frameworks) en Histoire de l'Art - Regards croisés sur l'Occident, le Japon et l'Asie* The University of Tokyo, The Tokyo National Museum, La Maison franco-japonaise (France, Paris), du 9 au 14 juin 2014.

三浦篤、シンポジウム「「セザンヌ - パリとプロヴァンス展」から見る今日のセザンヌ」、発表「セザンヌのパリ - マネとの関係を中心に」、国立新美術館(東京都・港区)、2012年5月26日

〔図書〕(計 3 件)

三浦篤『まなざしのレッスン 西洋近現代絵画』東京大学出版会、2015年、282 p.

Miura Atsushi (éd.), *Wakugumi (cadres conceptuelles / Frameworks) en Histoire de l'Art – Regards croisés sur l'Occident, le Japon et l'Asie*, The University of Tokyo, 2014, 74 p.

三浦篤『名画に隠された「二重の謎」— 印象派が「事件」だった時代』小学館、2012年、191 p.

〔その他〕

ホームページ

<https://sites.google.com/site/miura1832/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三浦篤 (Miura Atsushi)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10212226

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：